

Evaluation of mapping biopsies for extramammary Paget disease: A retrospective study

加来, 裕美子

<https://hdl.handle.net/2324/4475002>

出版情報 : Kyushu University, 2020, 博士 (医学), 課程博士
バージョン :
権利関係 : (c) 2017 by the American Academy of Dermatology, Inc.

氏 名：加来 裕美子

論 文 名：Evaluation of mapping biopsies for extramammary Paget disease:
A retrospective study
(乳房外パジェット病におけるマッピング生検の評価：後ろ向き研究)

区 分：甲

論 文 内 容 の 要 旨

乳房外 Paget 病は完全切除が達成できれば、予後は比較的良好な悪性腫瘍とされている。しかし、時折境界が不明瞭であったり、予想外に病変が進展していたりと正確な切除ラインの設定が難しいという問題があった。本邦では、術前にマッピング生検を行うことで切除マージンを設定する方法がとられてきたが、侵襲の大きい方法であるにも関わらず、その有用性について十分な検討がなされていなかった。本研究では、境界明瞭な病変と不明瞭な病変の2つのグループに分け、マッピング生検の有用性と切除マージンについて後ろ向きに検討を行った。133名、150病変を対象とし、マッピング生検として975ヶ所を統計学的に検討した。検討の結果、マッピング生検の有用性は限定的であり、境界明瞭な病変では手術時の切除マージンを1cm、境界不明瞭な病変では2cm確保できれば、術前のマッピング生検は必要ないと考えた。一方で、境界不明瞭な病変で切除マージンを2cm未満に縮小したい場合にのみマッピング生検を考慮しても良いと考えている。